

## 6. 高住神社にまつわる歴史的風致

### I. はじめに

英彦山では古来より春の松会、秋の豊前坊大祭が行われていた。春は靈仙寺境内で万物生成を予祝して松会を行い、秋には豊前坊で万物成就を祝って神幸祭を行っており、その後全ての神々に感謝し、採燈護摩供を行っている。

豊前坊は、時代の流れの中で高住神社と名を変えたが、今も英彦山信仰の東の玄関としてその役割を果たし、牛馬信仰の中心地として農村部から多くの参詣者を集めている。

高住神社は、旧称は豊前坊、竹台権現といい、『彦山記』（江戸時代）には「豊前嶺一に鷹栖の宮という、高天原の奥にあり、主神燐愍童子と称す大日靈貫尊の変身也、脇士火明命火返と云う、行者開峯の時出現也…」とあり、豊前豊後の国の守護神として鷹巣山に祀られ、遠く繼体天皇の御代（1500年前頃）藤原恒雄の御神託によって豊前坊社が創建されたと伝えられている。この祭神は人々の病苦を救い、農業や牛馬・家内安全の神として農村の人々から崇められ、豊前坊信仰として各地に伝わっている。また、九州の天狗の頭領「豊前坊天狗」の宮として、現在でも修験者たちの信仰を集めている。

高住神社の社は、修行の窟の岩屋に取り付いて建てられ、身のすぐむような断崖絶壁である望雲台行場など、天狗の住処に相応しい景勝地がある。また、高住神社は、英彦山北岳（法輪岳、標高1192m）の登山口に位置し、多くの参詣者が訪れている。



高住神社（豊前坊）参道



望雲台行場

豊前坊信仰は英彦山権現信仰と並び英彦山信仰の中核をなすもので、牛馬の守神として農村部に多くの信者を抱えていた。権現講で英彦山を参詣するときには、必ず豊前坊も参詣した。『大分縣地方史21号』（昭和34年（1959））に所収された「日田郡津江の代参講」によると、前津江村（現、日田市）星払集落では毎年春秋の2回、代参者2、3名をクジで決めて参拝させた。春は英彦山市の立つ3月15日、秋には豊前坊の市立つ旧暦8月の丑日に参詣した。前津江からは9里の道のりで日田の小野川沿いに登り、岳滅鬼峠から英彦山入りした。代参者のほかに初参りの者数名が同行した。上宮にも参詣し、豊前坊では牛馬の安全を祈願して熊笹を持ち帰り、牛馬に与えた。このように牛馬への信仰が篤かったことから、豊前坊境内には江戸時代に田川郡6名の大庄屋によって銅製御神牛が寄進されており、農村部に深い信仰があったことが窺える。

昔から英彦山権現を参詣した者は、必ず帰途に豊前坊を参詣した。江戸時代の紀行文『日本九峰修行日記』（野田せんこういん 泉光院、文政元年（1818））には「豊前坊といふ天狗の宮へ詣づ」とあり、『西遊雑記』（古川古松軒、天明3年（1783））では豊前坊は「名高き天狗堂」とある。天狗の堂として、英彦山の重要な行場であった。



銅製御神牛（天保9年（1839））

## II. 歴史的風致

### 6-1. 神幸祭（豊前坊丑日祭）にみる歴史的風致

#### （1）はじめに

高住神社は、一般には牛馬の神あるいは農業の神として信仰されてきた。万物成就を祝つて行われる高住神社の神幸祭は、古くは丑祭りといい、8月初旬丑の日に行われてきた。

秋に行う神幸祭はこの祭りだけで、氏子のみならず牛馬の繁殖を願う遠近の村人が寄り合ひ、相撲や牛馬加幣（牛くじ）などで大いに盛り上がったと云われる。

現在、9月の第二土曜、日曜の2日間に改められ、本物の仔牛が贈呈されていた牛くじ景品の特賞は、牛の置物へと代替されている。牛くじは一般に販売されるものとは別に、氏子である英彦山地区の家々に講員として配られる札が駕輿丁札（神幸祭のときの役割札）とともに配られ、英彦山の秋の風物詩となっている。



牛くじ案内告示（高住神社）



氏子に渡される駕輿丁札と牛くじ札

#### （2）歴史的風致を構成する建造物

##### 1) 高住神社

高住神社は、北東中腹に鎮座する神社である。「英彦山の建築」（昭和53年（1978）『増補 英彦山』所収）には元和9年（1623）に小倉藩主細川忠興、鍋島勝茂によって豊前窟に神殿、拝殿、瑞籬が建立寄進されたことが示されている。現在境内に当時の豊前窟の扁額がある。その後幾度か佐賀藩主鍋島家等によって營繕してきたが、文政年間（1818～29）中に現地に遷座した。神殿は岩窟に向拝1間余りの建築物をはめ込んで、入母屋造、破風銅板葺の5間規模の拝殿で覆っている。神殿・拝殿の建築年は不明であり、平成12年（2000）に拝殿が改築された。

また境内の石鳥居は元禄10年（1698）、青銅の神牛は天保9年（1839）にともに五穀豊穣、牛馬・家内安全を祈願して、田川郡の大庄屋6人が建てたもので、現在でも農業の神と崇敬篤く、九州一円から農業・牛馬安全の参詣を集めている。また火伏せの神とも知られ、火難除のお宮としても名高い。



高住神社



石鳥居（元禄10年（1698））

表 そのほかの歴史的風致を構成する建造物（他の歴史的風致において概要を記載）

建造物名		掲載ページ
1	英彦山神宮銅鳥居	2-11
2	旅殿	2-26

### （3）歴史的風致を構成する活動

### 1) 神幸祭（豊前坊丑日祭）

高住神社の神幸祭は、『添田町誌』（昭和34年（1959））によると、江戸時代から豊前坊秋の大祭として知られていたようである。昭和27年（1952）に高住神社が文部省に提出した神社明細書においても、神幸祭が9月二の丑の日に実施することが記載されている。

高住神社の神幸祭は、初日、午後1時から神社内で祭典祓いを行った後、午後2時に神輿<sup>みこし</sup>発輦<sup>はつれん</sup>が行われ、氏子によって担ぎ出される。この神輿は六角形の蓮華輿様<sup>かよじょう</sup>を成していて、修験道時代の神仏習合の名残とみられる。駕輿<sup>こうよ</sup>丁役は高住神社紋の入ったハチマキをして、上下白衣を着る。ひとつの担ぎ棒に4人計16名で担いで、参道を勇壮に下る。昔は英彦山住民総出の駕輿<sup>こうよ</sup>丁役が交代で馬場から惣持院谷、別所谷を練り歩き、英彦山町から参道を下り、御旅所に辿り着いた。



神社から担ぎ出る神輿

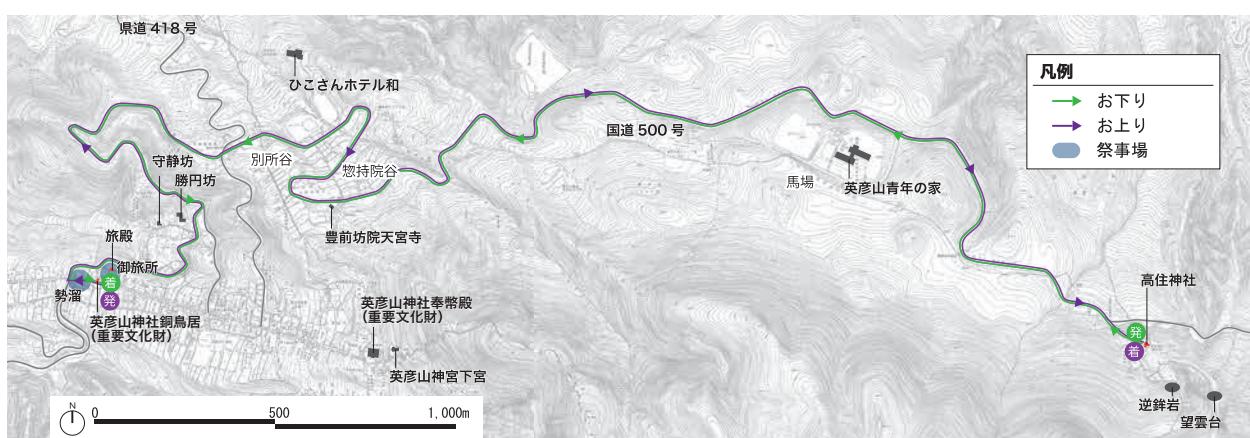


氏子によってお下りする神輿

高住神社の鳥居下まで降りると、そこから別所谷を通り、午後3時に英彦山神宮銅鳥居の下の蟇溜に行き、銅鳥居をくぐって、御旅所に着替する。

御旅所に着くと神官による着座祭典の後、白衣に赤袴を着て、右手に神楽鈴、左手に幣串を持った6名の稚兒が、安置された神輿前で輪になつて右回りに鈴を振つて舞を奉納する。

御旅所では安置された神輿に常夜灯が灯され、遅くまで参詣者がお参りをするため、氏子総代によって夜籠が行われる。



## 図 高住神社の神事祭のルート



銅鳥居をくぐる神輿



神輿着座の稚兒舞



夜籠される神輿

2日目は御旅所で牛くじの抽選会が行われる。その後の午後1時から御旅所で神輿還御祭後、前日と同様に稚兒舞が奉納される。神輿は還御へと出立し、英彦山神宮銅鳥居から再び別所谷を通り、高住神社へと還御する。高住神社鳥居からは駕輿丁役が神輿を担ぎ勇壮に駆け上る。

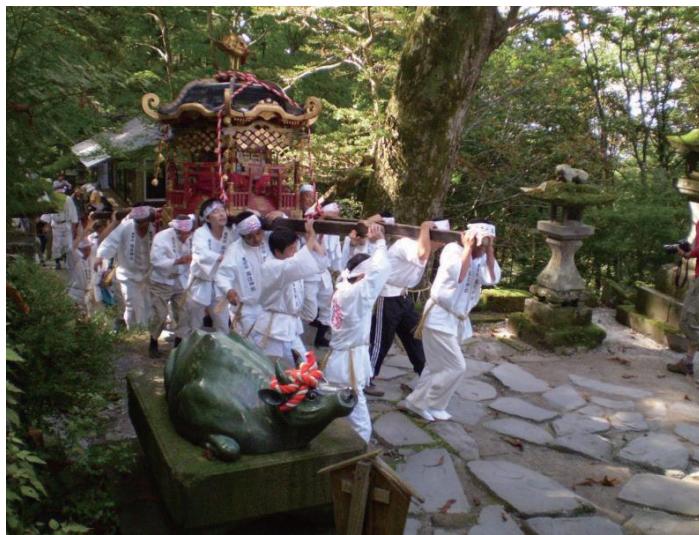
神輿着輦祭御靈移しの後、神社では駕輿丁役、総代による直会座が行われる。



牛くじ特賞者の賞品授与



お上り還御での稚兒舞



高住神社神輿の還御

#### (4) まとめ

豊前坊は高住神社と名を変えた今も英彦山信仰の北の玄関としての役割を果たし、牛馬信仰の中心として農村部から多くの参詣者を集めている。高住神社から発輦する六角形の蓮華輿様を成す神輿は、高住神社の参道から英彦山神宮銅鳥居、御旅所へと長い距離を神幸する。深い山々の中で神輿の神幸する迫力ある様子は、歴史的風致を形成している。

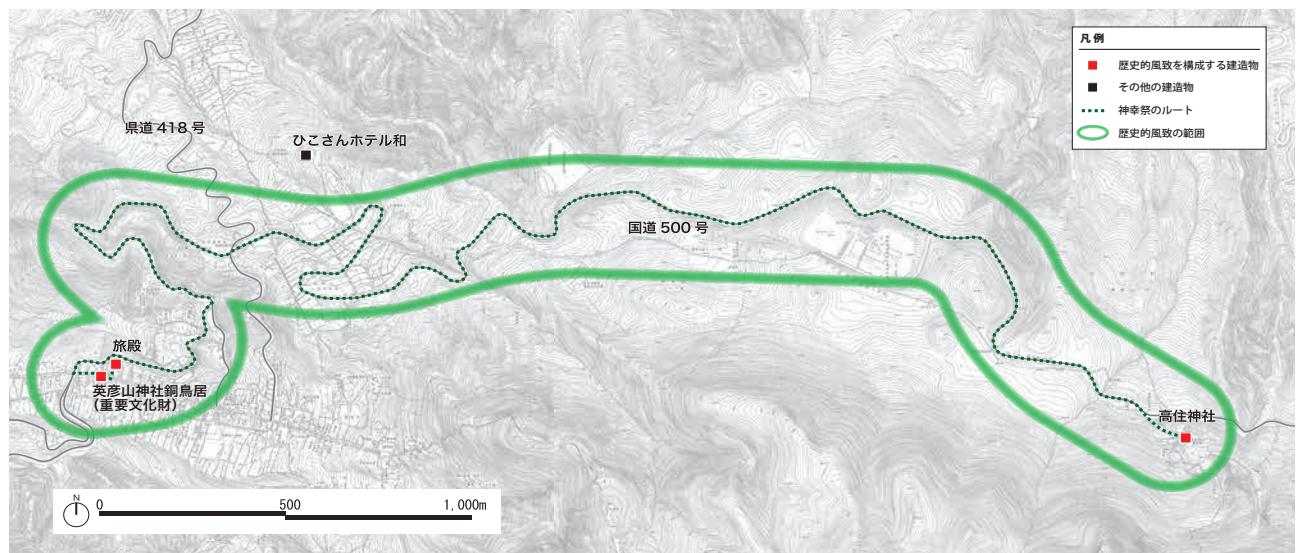


図 神幸祭（豊前坊丑日祭）にみる歴史的風致の範囲

## 6-2. 豊前坊採燈護摩供にみる歴史的風致

### (1) はじめに

豊前坊の採燈護摩供は、英彦山に伝承されてきた修験道の修法を今日に伝えている行事である。高住神社の境内に設けられた採燈護摩供道場において、修験道の修法を執り行う。

廃仏毀釈の影響を受けながらも、連綿と続いてきたもので、かつて興隆した英彦山修験道の姿を思い起こさせる。

### (2) 歴史的風致を構成する建造物

豊前坊の採燈護摩供にかかわり歴史的風致を構成する建造物は、高住神社をはじめとする下表のものである。

表 歴史的風致を構成する建造物(他の歴史的風致において概要を記載)

	建造物名	掲載ページ
1	英彦山神宮奉幣殿	2-5
2	英彦山神宮銅鳥居	2-11
3	英彦山神宮上宮	2-79
4	高住神社	2-87

### (3) 歴史的風致を構成する活動

#### 1) 採燈護摩供

明治維新の神仏分離令の発布、明治5年(1872)の修験宗廃止令により英彦山修験道は廃止となった。このような法難の中、多聞坊宗憲は九度の峯入りを実践し、英彦山の峰中行が根絶するのを危惧して『入峰中秘密行要口決』(明治時代)を子孫に託した。これは現在、奈良県吉野の修験本宗金峯山寺で保管されている。これ以降、代々多聞坊によって英彦山の修験伝統法脈が明治、大正、昭和へと受け継がれた。『英彦山神社日記』(明治22年(1889))には「八月二十三日晴…蒲池多聞参入、当秋八月十八日、宝満修験入峯修行有之」とあり、国家神道の統制下にありながら峯入修行、採燈護摩供が行われ続けたことが記録されている。

しかし、軍事統制が進み、「官幣」神社である英彦山神社の神事として行うのは困難であったため、豊前坊で行われてきた。昭和52年(1977)からは11月3日に採燈護摩供と上宮登拝が高住神社祭事として慣例化し、昭和20年(1945)の終戦後に建立された修験寺院「豊前坊院天宮寺」や英彦山修験末裔の岩屋坊によって執り行われるようになった。

採燈護摩供は前日に、高住神社の境内地に壇木を組んでそれを檜葉で覆い包んで護摩壇を作る。中央と四方には御幣を付けた竹を立て、道場はしめ縄で結界され、護摩場が作られる。



図 高住神社採燈護摩供道場位置

11月3日当日の早朝、一行は英彦山神宮銅鳥居から英彦山神宮奉幣殿へと「懺悔、懺悔、六根清浄」の掛け声とともにに向かい、参詣後、英彦山神社上宮まで参拝を行う。参詣後は北岳から望雲台などの行場を参拝して高住神社へと入る。

道場前では法螺貝を吹き鳴らす山伏が先頭に立った行者集団が現れると「案内申す。案内申す。」と道場山伏が差し止める。ここから旅の行者が道場に入り護摩作法に加わることの許諾を得るため、山伏行者たる心得を問答する所作が行われる。この問答により正当法流の行者と認められると護摩場へと案内される。



参道に入る峯入行列



山伏問答の後、護摩場に入った一行

旅の山伏行者が着座すると「宝弓加持作法」が行われる。宝弓師が弓矢を取り護摩壇に向かう。宝弓文を唱え、その後右回りに東南西北、中央、鬼門の順に五大明王の名を唱え、6本の矢を宙に放って諸魔払いを行う。諸魔が祓われると、「宝劍加持作法」が行われる。宝劍師が護摩壇に向かい、宝劍文を唱え、その後「光」という字形に宝劍を振るう。不動明王と不二の境地に入り、道場の諸天善神の守護により護摩を修めることを觀念する。次に、「宝斧作法」が行われる。斧師が宝斧を持って護摩壇に向かい、同様に宝斧文を唱え、その後、壇の左右を各々3回「エイエイアバン」と掛け声を発し、斧を打ち下ろす。山神諸仏に願い、護摩に用いる薪、檜葉等を伐る所作である。このような作法で護摩場が清められると、採燈護摩供の本座へと入る。



宝弓加持作法



宝劍加持作法



宝斧作法



祭文奏上

だいせんだつ  
本座では大先達が「謹み敬いて真言教主大日如来英彦山峰中三所權現…」と祭文を奏上し、護摩壇に火を渡す。大先達の合図で護摩に火が入ると読経の中、大日如来をはじめとする諸仏の智恵を得るため護摩木が壇に投げ込まれ、立ち上る炎に参詣者が熱心に合掌する。



採燈護摩作法



火渡り作法の準備

護摩焚きが終わると、大先達は護摩灰で床を作り、無病息災を祈ってこの護摩灰中を渡る「火生三昧行事」が執り行われる。採燈護摩を修行したことにより神仏の智恵を得た行者に続いて、参詣者が合掌しながら次々に香煙の中を渡っていく。



火生三昧行事（火渡り行事）



参詣者による火渡り行事

#### (4) まとめ

天狗が住むという高住神社豊前坊は深山幽谷に囲まれ、採燈護摩の法螺貝の音が幾重にも峰々を伝っていく。朦々と立ち上る護摩の燻煙には往時の山伏が厳しい修行で感得した神仏の息吹が今も感じられる。農耕の神として權現講、代參講で多くの参詣者が訪れた丑日祭の神輿にも人々は豊かな実りを感謝し、合掌し祈る姿と祈る姿が今も続けられている。

人々の祈りの姿、法螺貝の音や揺らめく護摩壇の炎、修行の場と自然環境とが一体となり、歴史的風致を形成している。

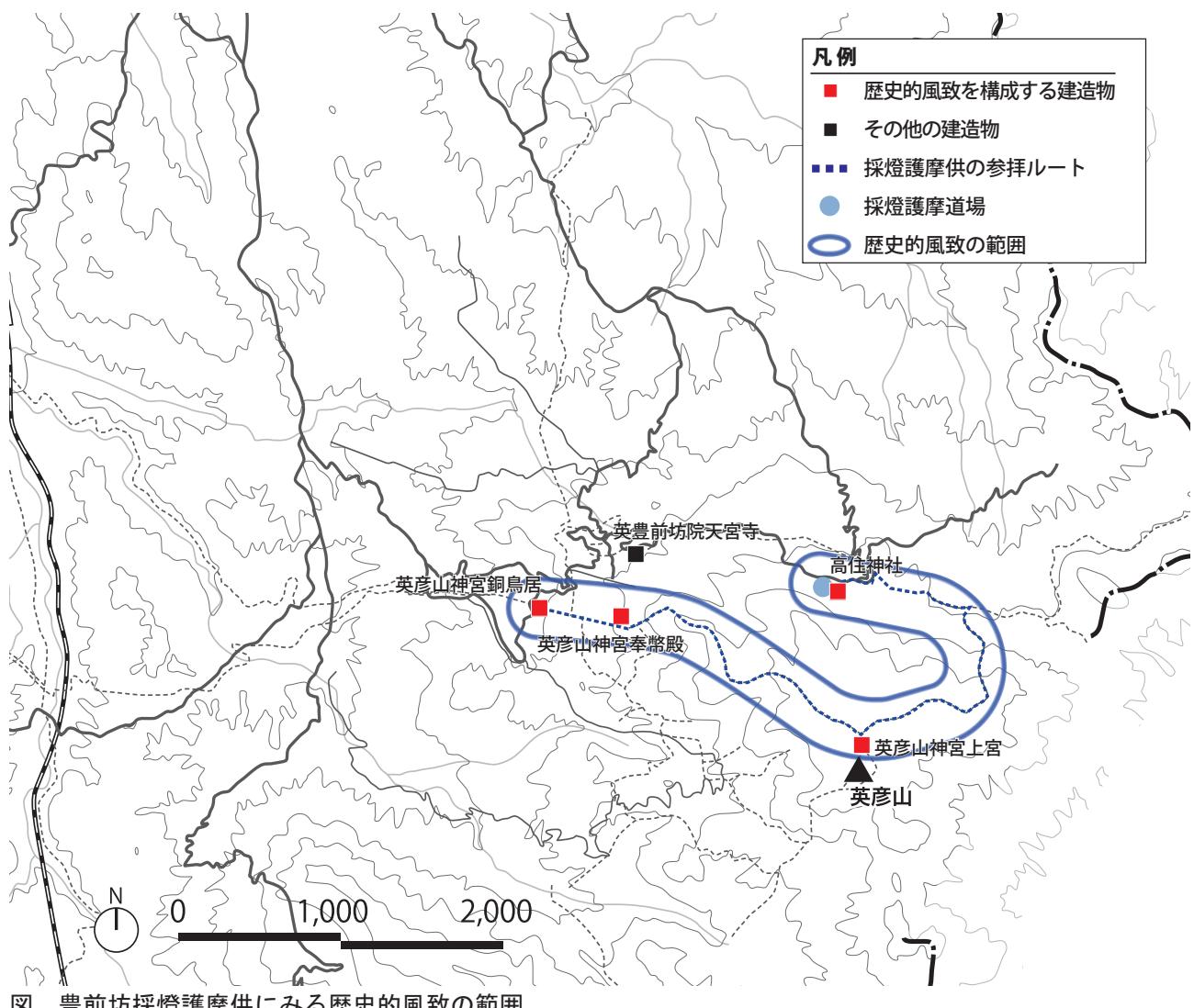


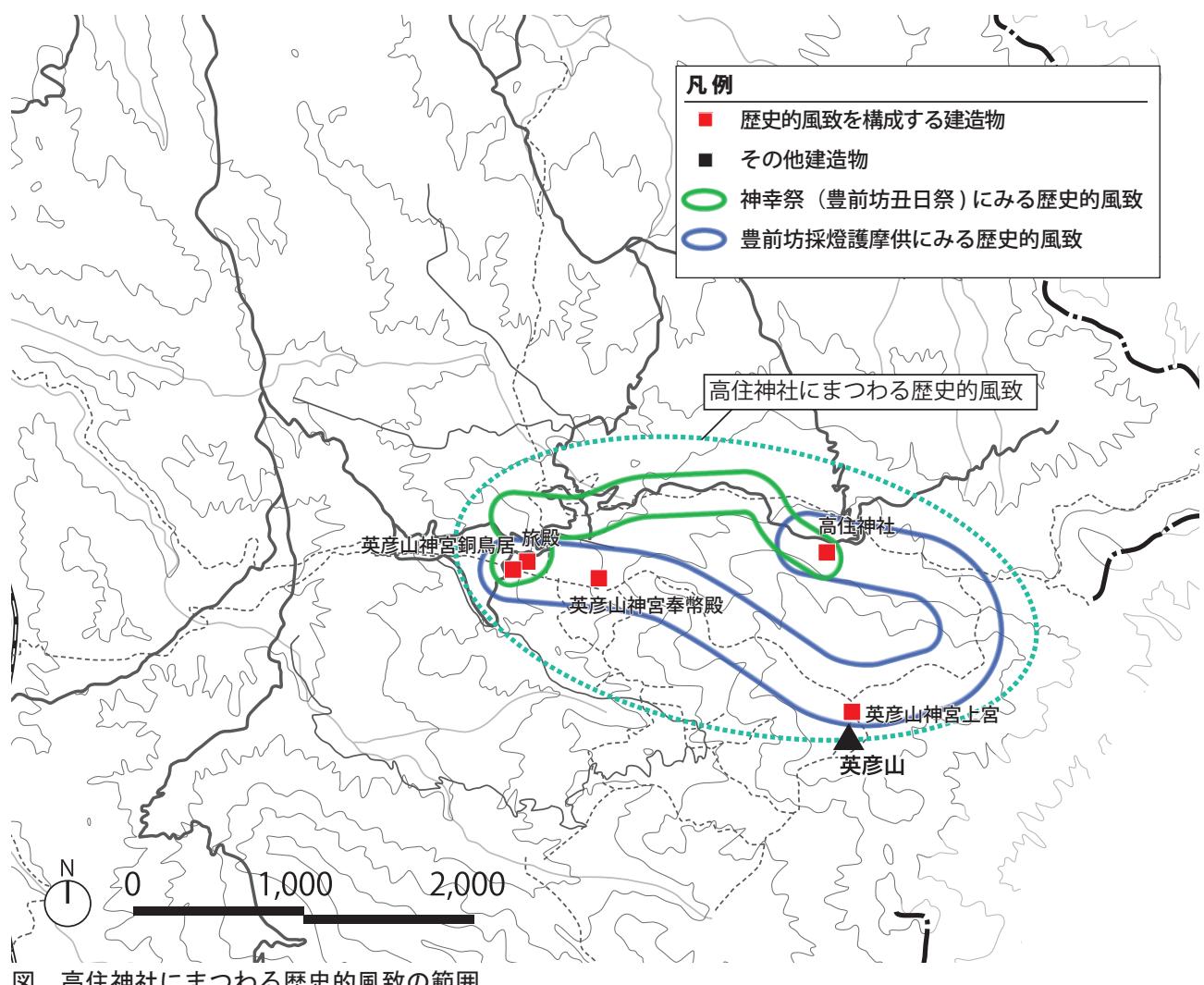
図 豊前坊採燈護摩供にみる歴史的風致の範囲

### III. おわりに

高住神社は、古来より英彦山信仰において重要な役割を果たしている。牛馬信仰の中心として農村部から多くの参詣者を集めており、神幸祭においては、高住神社の参道から英彦山神宮銅鳥居、御旅所へと長い距離を神幸し、神輿巡幸や稚児舞等のきらびやかな光景や牛くじといった牛馬に関するの篤い信仰をみることができる。

豊前坊採燈護摩供は、明治の廃仏毀釈の難にあいながらも、修驗道の修法を現在まで伝えている儀式であり、かつての山伏達の修行の様子をしのぶことができる。

このように、今まで続く高住神社にまつわる行事は、周辺の建造物や山々の環境とが一体となり、歴史的風致を形成している。



## コラム4 豊前坊天狗

### ■英彦山の天狗

日本を代表する八天狗は、愛宕山太郎坊、比良山次郎坊、飯綱三郎、鞍馬山僧正坊、大山伯耆坊、彦山豊前坊、大峰山前鬼坊、白峰相模坊である。

その内、彦山豊前坊は九州天狗の頭領として、天津日子忍骨命が天下ったもので、<sup>えんの</sup>役行者がこの山で修行したとき、それを祝福して出現したとされる。

豊前坊天狗は、その靈力で慈悲と幸福をもたらすとして信仰され、高住神社は今も「天狗の社」として、深く崇敬されている。

また、室町時代世阿弥が撰じた謡曲「鞍馬天狗」では御供の天狗を牛若丸が選ぶときに「筑紫には豊前坊」と答えて諸国行脚に従えたといい、「花月」では幼子を攫う天狗として表わされている。豊前坊天狗は室町時代より数々の伝記や説話に登場し、広く親しまれてきた。

また、造形としても天狗面、鼻高面として作例も多く、江戸時代から英彦山には多くの木彫面が残されている。

今では陶面として、町内各所の工房で作られ、家内守護の英彦山みやげとして親しまれている。



天狗面が掛けられた高住神社拝殿



英彦山神宮に伝わる天狗面  
(江戸時代)